

波田歴史愛好会研修

— 和地区文化財巡りに参加して —



無極寺本堂

9月18日(金)午前8時、波田公民館の前には愛好会会長の百瀬光信さんはじめ13人が集まりました。車に分乗し和田公民館に到着すると、現公民館長さんと前館長さんが出迎えてくださり、半日案内までしていただきました。主なコースは、
無極寺→窪田空穂記念館→西善寺→和神神社→萬年寺→天然記念物コウヤマキ



萩原家コウヤマキ

最初の訪問地、無極寺では第34代ご住職の説明後、ご厚意で内陣に上がらせていただきました。極楽浄土を模した壇上で三尊仏、また周囲の彫刻等を間近で拝見。続いて、窪田空穂記念館へ。館長さんの説明では、西南戦役の年に生まれた空穂は、小学時代、ここから開智小まで片道8キロの道を通ったとのこと。十歳前後の子供が現代ではとても考えられないことです。
次の西善寺は天台宗の寺。ご住職のご厚意で阿弥陀三尊が祀られる内陣をぐるりと一周。左右の菩薩は真横から見ると軽く膝を曲げ、かすかに前かがみ(直立ではない!)の姿勢で、聞けば来迎を表わ

館報
はた

スージーちゃん スイカワくん

令和3年3月1日現在

世帯数	6,232戸
人口	15,517人
男	7,500人
女	8,017人

すという事でした。

一旦公民館に戻り一服後、和神神社へ。ここでは女性の神主さんが説明してくれました。(この方は森井神官という、波田の三神社の祭事も行っていたのだというとのことでした。)

曹洞宗萬年寺では本堂拝観の後、上原良司の墓に詣でました。特攻で沖縄の海に散った彼の遺書は「きけわだつみのこえ」にも載り、自身英国流自由主義の標榜者として有名です。二人いた兄も戦死し三名連記の墓石が哀れを誘いました。

最後は、蘇我萩原家の県最大級のコウヤマキを見学。巨木は途中から二股に分かれ、30メートルにならんとする今も葉は濃い緑で樹勢盛ん。その根元近く、一尺に満たぬ幼樹を植えた鉢がいくつか置いてありました。これが隣の親樹のような大木となるのに何百年かかるのだらうと思

はじめから終わりまで行く先々での温かいもてなしに感謝の研修でした。

1区
こころの繋がり

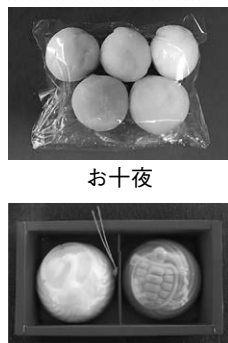
地区の伝統や文化、長きにわたり継承され続け、日常生活に溶け込み、例年同様に計画された様々な行事は、その全てが多岐の人が集まり、密集して行われる行事・神事のため、コロナ禍の令和2年度は異例の形で開催となりました。

8月に開催された「風祭り」は役員と宮総代の出席のみで神事が執り行われました。例年華やかに、行われていた9月の「敬老会」。今まで地区を守り、支え、貢献して下さった諸先輩方が集まり、昔話に花が咲き、飲んで歌って、日本舞踊まで披露してくださいました。

本舞踊まで披露してくださいました。集落センターでの大祝賀会は開催されず、地区内対象者の180人の皆様に「鶴・亀」の



風祭り



敬老会「鶴亀石鯛」



紅白の石鯛と日本製のタオルが届けられました。
また、秋の風物詩の一つである「三神社の秋祭り」も当然中止となり、10月に行われた「お十夜」の団子は、手作りではない既製品が奉納され、神事のみ真光寺で行われました。
共に集まり、人伝に大切に伝承されてきた地域の大切な文化の「かたち」が大きく変えられてしまった一年でした。そんな中、敬老会のプレゼントにはその日のうちに複数の方から丁寧なお礼と感謝のお言葉を頂き、大変感動しました。「からだは離れていても心は近くありたい」こんな想いの役員一同でした。
来年度こそ各種行事が「えがおで皆が集まり、語り合い、助け合い、盛会に開催されること」を願います。

読書の良さ



新型コロナウイルスが日本で初めて確認されてから一年が経った。外出を控え、家の中で休日を過ごす時間が増えた人も多いのではないだろうか。そんな「おうち時間」の過ごし方の一つとして読書が挙げられる。読書は、多少はお金がかかるが、外出をすることなくそれなりに時間をつぶすことができる。まさに「おうち時間」の過ごし方としてぴったりのだろう。そんな読書の良さを、筆者なりに書いていきたい。読書の良さというと、例えば読む力が定着するだとか、使える言葉が増えるだとか、日常生活における利便性に直結することが思い浮かびやすい。しかし読書の良さはそれだけに尽くされない。私は思う。「おうち時間」の過ごし方に困っている方や、新しく趣味として読書を始めてみたい方のためになれば幸いだ。なお、ひとくちに読書といっても様々なものがある。ここでは物語や小説、詩や和歌などの類のものとした。

「心」を知ることができるということだ。例にとってみよう。

平安時代に生きた歌人、藤原敏行は「秋来ぬと月にはささやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる(秋の到来は目にははつきりと見えないけれど、風の音ではと気づかされたことであるよ)」という歌を残している。

秋の到来を視覚ではなく聴覚で感じているのである。季節を、目や気温で感じる現代の私たちにとっては、とても新しい感覚である。

季節を、耳で感じるということを知った私たちは、季節ごとの風に耳をすまし、新たな「心」をもって季節を楽しむことができるのである。

このように物語や小説、詩や和歌には私たちの知らない感性や感情、感覚が描かれている。私たち読者は、今の自分の持っている「心」が全てであると思って読書をしがちである。

しかし、それらには、私たちが知らない「心」がまだまだ描かれている。

それらを知った時、私たちの「心」は豊かになり、日常生活にさらなる彩りが加わるのである。



4区三九郎―「無病息災」の願いを込めて―

4区では、新年の伝統行事の三九郎を令和3年1月9日(土)に行いました。

コロナ感染症の感染拡大で中止とする地域が多い中で、4区でも中止か開催で意見が分かれぎりぎりまで協議をした結果、「無病息災」「五穀豊穡」を願った火祭りでもあり、伝統行事の火を消さないために三九郎は開催したほうが良いと決定しました。

4区では伝統行事保存会と言う組織があり、1月の「三九郎」と、8月お盆の時期の「盆火流し」の2つの伝統行事を守るために約50名の会員で取り組んでいます。

今回は感染防止対策を徹底し規模を縮小して、保存会主体での開催としました。

例年ですと、大小2つの三九郎を作るのですが、1つのみとし、作りも少し簡略化し製作しました。

参加人数は少なめでしたが1つなので、1時間もかからずに作り終えました。

例年なら作り終えたら直ぐに火を入れるのですが、時間が早かったので一旦解散し、再集合としました。

集合時間になり、区民の皆様が、集まってきましたが、例年より参加者は少なめでした。

11時の点火時間となり、参加した子供の手で三九郎に火が入りました。

一気に三九郎が燃え上がる様子を眺めていると、感慨深いものがあり、開催して良かったと思いました。

令和2年度はコロナ禍の影響で色々な行事や活動に制約がかなり、不自由な生活を強いられる一年でした。

来年度は、感染症の流行が一日でも早く治まり、心おきなく行事を楽しめ、平穏な生活を送る事が出来る日々が来る事を、三九郎の火に強く願いを込めて行事を終えました。



我が家の息子たちがまだ幼かった頃、真夏に近所の方に頂いたミニトマトを口いっぱいにはおぼりながら「このミニトマトおひさまの味がするね。」と満面の笑みで私に話しかけてきました。もうだいぶ成長した最近も息子は、祖父母が家庭菜園で作ったにんじんを「にんじんのいい匂いをする。」と言ってとても美味しそうに食べていました。そんな子供達を見て、春になると今年こそは美味しい野菜を自分で作ってみよう!ともの何年か思い続けています。しかし、春が来て、母や義母に「そろそろきゅうりの苗を植えないだよ。」などと助言と援助を受け、何とか苗を植えることができて、草むしりや追肥、収穫等は仕事の忙しさを理由になかなか追いつきません。結局、周囲の人達の力を借りて何とか家庭菜園を維持しているような状態です。今年もまた春が近付き、母からもらつて蒔いたほうれん草の種が芽を出していることに感動しながら「今年こそはずくを出して自分の力で美味しい野菜を作るぞ。」と心に誓っています。